



THINK × ACT
KANSAI
UNIVERSITY



CTL Kansai University Center for Teaching and Learning Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

March 2014

vol. 14



三者協働型アクティブラーニング から見たMOOCとの関わり合い

教育推進部 副部長 山本 敏幸

本ニュースレター Vol.8では映写機を発明したエディソンの教育に対する夢について触れたが、その延長として、映像メディアを中心に昨今、高等教育の現場で話題になっているMOOCについて考えてみる。

MOOCとは、Massive Open Online Coursesのこととで、MOOCムーブメントのきっかけとなったカーンアカデミー創設者S.カーン氏が体系だった質の高い教育を貧富の差に関わらず、世界中の全ての学習者に無償で提供することを掲げ、自ら実践したことで端を発し、財界の大物達の資金援助支援の下で拡大した、インターネットを活用した新しい教育の形態である。

MOOCの急速な普及の背景には、次のような経済効果があるからある。優秀な学生人材確保に奔走する米国の大手大学がこのMOOCに目をつけ、自分たちが提供する教材コンテンツで世界中からネットでアクセスしてくる学生候補を容易く発掘できる仕組みがここに出来上がった。さらに、こういった人材を世界中から発掘し、米国の有名大学に送り込み、卒業時にはこういった人材を必要とする企業に有望な社員として紹介するビジネスモデルが確立している。

MOOC以前の従来型のeラーニングのコンテンツは、世界規模の統一化された文書形式を目的としたテクノロジーであるHTMLの進化と共に普及してきた教育形態である。多少の画像があるものの、文字中心のコンテンツが主流のeBook的な性格が

強く、インターネットで配信できる電子教科書といった位置づけであった。インタラクティブな学び、実際に仲間たちと授業を受けているような臨場感の要素が欠けていた。どちらかといえば、教員目線の教材コンテンツを学習者個々人に一方的に提供することが多く、学習者視点の学びの促進、受講生同士の絆や喜びの共有とはほど遠いものであった。

一方、MOOCコンテンツは実際に授業を受けているような臨場感のあるコンテンツを、映像メディアをふんだんに利用し、コースコンテンツとのインタラクティブな内在性の機能や担当教員と共に学ぶ受講生の仲間たちとのソーシャルなコミュニケーションの場を提供することで、同じコンテンツを学ぶ仲間たちが知識や経験を共有し共感することで学びを深めていくことを目指している。これは、本来の学びの姿のように思える。

しかし、日本の大学では大学レベルでこのMOOCの動きを素直に受け入れるにはかなりの無理がある。つまり、MOOCで提供されるコースはそれぞれのコースが独立して存在し、大学独自のミッションを主軸としたカリキュラム全体の構成要素になっていない点である。MOOCで提供されるコースは言うなればデパートのショーウィンドーに並ぶような客寄せ用の目玉商品で、体系だった大学の教育理念は見えてこない。きちんとしたカリキュラムマップなしに受講者が望むコースを準備しても、ただの受講者の知的好奇心を満足させるための個々のコース

でしかない。これらのコースはいくら数が揃ってもカリキュラムにはなり得ないし、大学のミッションやビジョンの反映にはならない。

反面、MOOC以前は紙面上に印字された文字でしか知識、経験や知恵を残すことができなかつたが、MOOCコンテンツではこれまでの情報表現の集大成である映像、画像、音声、アニメーション、文字などのリッチメディアでの表現が可能となる。つまり、本来の学習コンテンツの利用者と同じ目線の学生たちによる、インタラクティブな教材コンテンツの開発、教育者としての経験、工夫、知恵の可視化が可能となるのである。これは教育者としてこれまでの教育経験をふりかえりによりメタ認知するというFDにつながることになる。強いては、教鞭を取っている大学の誇りある知的財産として継続し、後世に残せる遺産となるのではないだろうか。

今MOOCを活用して本学が取り組むべき一つの教育事業として私が思いつくのは、高等教育機関の使命の一つとして、日本の全般的な教育水準の基礎学力が身についていない、日本中にいる子供達に社会人になる前にもう一度学び直しのチャンスを与えること、都会に生まれた子供達と同等レベルの教育を受ける機会を与えること、また、分数、小数等の基本的な概念すら分からずに大きくなってしまった人たちに手を差し伸べる教育の仕組みが確立できることである。

本学の使命は、考動力ある人材育成で将来の日本において社会貢献できる人材を輩出することにとどまらず、社会貢献の一環として、基礎的な教養を身につける機会を逸してしまった人たちの学びなおしの機会を無償で提供することも含まれるように思う。MOOCムーブメントを機に、本学でなければできない三者協働型アクティブ・ラーニングの成果を反映した学びの場を構築できれば素晴らしいことである。